

鳥獣害便り



やまだのかかし

地域の鳥獣害をサポートするサイトです。

編集・発行：山村 準
tel:0595-63-1725
Email: jyun.y@asint.jp

獣害対策の基本は、 敵を知ることです。

(シカ・イノシシ・サル編)

シリーズ ①

サルの習性



野生のニホンザル
(以下サルと表記)
は、知能が高く学習
能力が優れています。

群れは、メス中心の血縁集団です。大人のオスは群れの中に一割程度しかいないといわれます。野生の群れには、ボスはいません。メスは生涯生まれた群れを出ることはなく、母と娘の親子関係は集団の中で一生続きます。この血縁集団が集まったものを群れといっています。

一方、オスは性成熟期に達すると群れを出るので、その時点で母親との関係は途絶えます。このオスザル達をハナレザルと呼んでいます。オスがどんなきっかけで群れを出るのかは分かっていますが、結果的に近親相姦を避けられています。交尾期は10月から翌1月ごろで、出産期は4月から7月ごろ。隔年1頭を出産します。栄養状態がよいと毎年。

活動の多くは食べることに費やされ1日の70%以上の時間をかけて食べ続けても、必要なエネルギーを確保することができないといわれています。

決まったねぐらを持たず、日が暮

れたらそこがねぐらになります。夜は活動しませんが、朝は早く明けしらむ頃から活動し始めます。一日の遊動距離は1^{km}~3^{km}が普通です。遊動域を均等に利用するのではなくその時期の主要な食物の分布にあわせて変化します。遊動域内に針葉樹林が含まれていると餌場としての価値が低いため、必然的に遊動域は広くなります。群れは、地縁集団なので遊動域は変わらなくつづきます。

食物も季節により変化します。もっとも食物の不足する冬には常緑樹林帯では成熟葉、落葉樹林帯では冬芽や樹皮なども採食します。雑食性で昆虫やカエルなど何でも菜食します。野生での菜食は栄養価が低いので、必然的に農作物を狙うのです。記憶力は抜群で、一度味わった恐怖体験は忘れません。場所や状況も覚えていて、農作物の味を覚えてしまうと、何度でも畑や人里に出てくるようになります。サルは人間と同じ視覚動物で、食べものなどは目で見て判断をします。運動神経(特に四肢)が発達しているので防御はひじょうに困難です。サルの習性を考えて防護する必要があります。

寿命はだいたい20-25歳だそうです。

『鳥獣害便り』創刊に当たり 諸般の事情により猿 新聞は廃刊とし、心機 一転、猿新聞に変わる ものとして『鳥獣害便り』を発行することと 致します。

皆様方が、鳥獣害の 原因や対策を総合的に 見つけ直す端緒になれ ば幸いです。尚、鳥獣 害便りは季刊誌として 発行を予定しています。 鳥獣害対策では主体 となるのは地域です。 地域全体が共通の認 識や情報を共有し地域 全体が一丸となって進 めていくことにより、 効果的な獣害防止対策 が進むものと確信致し ます。

今後は獣害対策の原 点に立ち返り充実した 情報を 発信し てゆきたいと考えてい ます。

皆様方の更なるご支 援ご協力のほどを宜し くお願い申し上げます。 尚、ホームページ やまだのかかしの扉は 何時も開いています。 パソコン・ス マフォで『鳥獣 害便り』はいつ でも、ご覧頂く ことが出来ます。是非お立ち寄り ください。 キーワードは 猿新聞です。(メニュー↓猿 新聞↓サル新聞 アーカイブ)



イノシシの習性



イノシシは夜行性の動物と思われがちですが、人間を警戒する必要がない場所では日中に活動しており、夜行性は人間の活動を警戒しての二次的な特徴のようです。定住期と移動期を繰り返す行動パターンを持ち、気に入った場所では2~3平方^{km}の範囲で行動するといわれています。広葉樹林や竹林、カヤ・ススキなどの草地に巣を作り生息しています。

体の大きさは、大きいもので体重で100^{kg}前後。キバがあるのがオスです。一夫多妻。2

ると単独行動。メスは子や姉妹と群れをつくります。

野生での寿命は10歳前後と言われています。極めて臆病で、警戒心が強い。「一度覚えると忘れない」「侵入に成功した仲間を真似る」「光、音、ニオイを使った防除の効果は一時的ですぐ慣れてしまう。」など学習能力が高く一度安全に侵入出来た圃場には毎年やってきます。

視力は弱く、青色のみ識別可能。嗅覚は犬に匹敵。農地に侵入する際は、鼻で探索するといわれています。視力は弱く、人間でいうところの0.1を下回る程度であり、敵や餌の発見は嗅覚・聴覚に頼っているようです。

成獣は1.2^m程度の跳躍力がありますが、上を越えるよりも下をくぐり抜けようとする傾向があります。

幼獣は15^{cm}の格子を通り抜け成獣は、20^{cm}程度の隙間はくぐり抜けるといいます。鼻の力は非常に強く、大きな石でも簡単に動かすことができます。50~60^{kg}程の重さのものを持ち上げ、地面を掘り起こす力も強力です。障害物が複雑になるにつれ、下をくぐって通りぬけようとする傾向があります。鼻先のみ電気柵の電気ショックを感じますが、剛毛の生えている部分は平気です。

雑食性で、タケノコ、イモ、クリ、ドングリ、稲の穂(乳熟期)、クズの根などの植物やミミズ、昆虫の幼虫など、ほとんど何でも食べます。

私たちが想像する以上に、イノシシは賢く手強い動物のようです。

ニホンジカの習性



ニホンジカ(以下シカと表記)は、昼夜問わず、活動と休息を繰り返します。畑や人など多い開放的な場所に出るのは夜の方が多いですが、日中に畑で目撃することも多くあり、本来シカは昼行性です。シカは助走なしに1.5^mの柵を飛び越えることができず、潜ることも多い傾向があります。体重は40~90^{kg}。オスの方が大きい。オスのみに角があり、毎年生えかわる。毛色は、夏毛は茶褐色に白斑。冬毛はオスは濃い茶色、メスは灰褐色。シカは群れで生活をしており、大人のオスは群れの中は一割程度の数しかおらず、繁殖期になると、オスはハーレムをつくり、メスは(一夫多妻)。秋は交尾期。初夏が産期。メスはふつう1年半で性的に成熟し、死が多くなっています。

約220日の妊娠期間を経て、毎年一頭を出産します。繁殖期を除き通常はオスの群れとメスの群れに分れています。オスの小鹿は母親とともに1~2歳までともに行動し、その後他のオスと群れを作ります。

有毒なシキミやアセビなどを除き、1000種類以上の植物を食べるといわれています。餌の少ない冬では落ち葉まで食べ尽くします。シカは反芻動物なので、消化能力が高く、食べ物の質が悪くても十分な栄養を得ることが出来ます。食性は地域や群れによって変化します。寿命はオスが10~12年、メスが15~20年程度。近頃は交通事故死が多くなっています。

外来種問題

近年、獣害は在来種による被害に加えて外国産の生き物による被害が目立って増えています。外来種とは、人間の活動に伴って、意図する、しないに関わらずそれまでその生き物が生息していなかった場所に持ち込まれた「生き物」のことです。


在来種でも、日本国内のある地域から、もともといなかった地域に持ち込まれた場合には外来種となり、もともとからその地域にいる生物に影響を与える場合があります。

外来種と呼んでいます。外来生物法では、明治時代以降に他国から持ち込まれた種を主に「国外由来の外来種」として定めています。被害が目立つハクビシンは、外来種か在来種かは不明。在来種だとする理由は、『江戸時代の書物にハクビシンが描かれていること』だといいます。

外来種の中で、地域の自然環境に大きな悪影響を及ぼす恐れのあるものを、特に侵略的

外来種と呼んでいます。もともとその場所でも生活していた在来生物との間で競争が起こり、在来種の減少や絶滅に追いやることもあります。また、近縁の在来種と交雑し、在来生物の遺伝的な独自性が損なわれるなど生態系への影響が大きいです。他にも、人の生命・身体への被害や農林水産業への被害、さらに生活環境にまで被害が及びます。

今後は、外来種問題にも光を当て、その原因や対策を発信してゆこうと考えています。



アライグマ、チュウゲ

身近まで来ている可能性があります！

- タヌキのような動物を見たが、尾にしま模様があった。
- 池の金魚、鯉、カメがいなくなった。食べられた。
- 田んぼの畦が荒らされた。
- 庭にある果樹が荒らされた。

畑を荒らしているのはアライグマかも！

- 田、畑、ビニールハウスなどに5本指の足跡がある。
- イチゴなどに今までなかったような農作物被害がある。
- トウモロコシが根本から倒され食べられていた。
- スイカに丸い穴が開いて中身が空になっていた。

家や空き屋、社寺に住み込んでいる可能性があります！

- 建物の周りに5本指の足跡がある。
- 柱や戸袋、雨樋に5本指の泥のついた足跡があり、上部に向けて登っている。
- 柱に5本指の爪痕があり、上部に向けて登っている。
- 軒下の壁の一部が破壊されている。

【大分県HPより引用】

シリーズ ①

獣害対策Q&A サル編

Q: キウイは食べますか？

A: キウイの食害は群れによって違います。ある一頭がヒヨンなことで熟れたキウイを食べ「コリヤイケル!」。これが群れ全体に伝播しその群れはキウイを食害するようになります。A地区では見向きもしない作物が、B地区では大きな食害を起こすというケースもあります。名張A群はキウイを食べますが、B群には今のところ被害は出ていません。群れ毎の学習によって変わってきます。

★人間の食べるものは、全てのサルが食べるということを念頭にして対策して下さい。

Q: 夜はどうしているの？

A: 山の上で寝ます。ニホンザルは基本的に夜は活動しません。また、特定の巣は作りません。餌を求めて遊動して日が暮ればそこが「ねぐら」になります。朝は早く「明けしらむ」頃から活動し始めます。

★満月の晩は活動するという人もおります。

Q: サルのオス・メス見分けかたは？

A: オトナのオスとメスの見分け方は、大ざっぱに言えばオスの方が体が大きく、体型はくさび形をしています。メスは体全体に丸みがあります。

しかし、小柄なオスもいますし、大柄なメスもいますので、もっとも確かな決め手は性器ということになります。オスには股間に陰囊とペニスがかぶら下がっています。特に秋の交尾季は睾丸が大きくなって下垂するのでよく目立ちます。メスはお尻から股の内側までが赤く見えます。

アカンボウサルの性別を見分けるのはむずかしいのですが、オスにはひらひらしたものががついています。3歳くらいまでの状態が観察できますので、股間をしっかりと見ればコドモでもオスとメスを見分けることはできます。

また、乳首がぼつちりと目立てばメス、犬歯が発達するので口の部分が大きめに見ればだいたいオス。

Q: サルの天敵はいるの？

A: 人間とクマタカだそうです。「広島県でニホンザルが30頭ほどの群で餌

を探していた。午後4時頃、クマタカが草むらから飛び立った。そこから殺されたばかりのサルの死体が発見された。サルは仰向けに倒れており、出血はしていなかったが、死体の周囲には毛が飛び散っていた。両眼は食べられていた。その日の夕方にもクマタカがサルの死体から飛び立つのが目撃された」。(ある「ウェブページ」で見かけました)

★サルはヘビが大の苦手だそうです。

Q: 群れの分裂はどうして起こるの？

A: あまり大きい群れだと群れの中で食物をめぐる競争が激しくなり、順位の低い家系の個体が集団で群れを出て行くことであります。それが分裂です。

銃による無謀な追い払いなどでも分裂することがあります。分裂をすると分布域が拡大し被害域も広がります。

Q: ニホンザルは日本中どこにもいるの？

A: 青森県・下北半島を北限に、日本各地に生息していますが、南の端は鹿児島県・屋久島です。

1998年4月、和歌山県でニホンザルとタイワンザルの交雑ザルが初めて発見されています。見分け方はニホンザルの尾っぽは10センチ程、タイワンザルの尾っぽは40センチ程と長い。これが形態上の違いです。

ニホンザルの遺伝子が変わってしまうという人がおりますが、ニホンザルとタイワンザルはほとんど同じ種で、問題はないというのが通説です。

Q: 鼻はきくの？

A: 視力は優れているが、臭覚、聴力は人間並みといわれています。餌を探すのは全て視覚に頼っています。意図的に隠してあるものには気が付きません。だが、毒キノコは食べないといわれていますが、なにで見分けているのかな？。臭い？。

※サルは、足も人間の手と同じくらい自由に機能し、ゲーチョキパーが出来るほどです。この手足の器用さが対策を難しくしているのです。

次号につづく (シカ編)

